

美斉津洋夫 家 所蔵

浅間山噴火絵図

美斉津絵図 A

明治大学黒耀石研究センター
堤 隆 編 2024.11.11刊

例 言

- 1 本書は、長野県小諸市美斉津洋夫家所蔵の浅間山噴火絵図：美斉津絵図Aの記録報告である。
- 2 掲載にあたっては、絵図を所蔵される美斉津洋夫家の承諾を得た。
- 3 また、その他の図版については巻末に提供者を掲載した。
- 4 本報告作成にあたっては以下の皆様のご配慮・ご教示を得た。厚く御礼申し上げる次第である。
美斉津洋夫、美斉津昭子、安井真也、大木文彦、関俊明、飯島聖、気象庁 浅間山火山防災連絡事務所
孺恋郷土資料館、長野県、群馬県 （敬称略・順不同）

目 次

例言	1	7 5月26日焼出し始めの体	7
1 浅間火山と天明三年（1783）の大噴火	2	8 此三日昼夜大焼屋之図	8
2 天明三年噴火（1783）による火山噴出物	3	9 七日暮六ツ時中刻	9
3 美斉津家による浅間山噴火絵図の保存	4	10 七月朔日六日七日夜分大焼之図	10
4 長野県佐久平からみた浅間山	4	11 焼口ヨリ又山一ツ吹出シタリ	11
5 美斉津絵図A8葉	5	12 信州浅間山全体之図	12
6 天明三年までの浅間山全体之図	6	13 享和三癸亥年十月七日	13

浅間火山と天明三年（1783）の大噴火

1 浅間火山と天明三年（1783）の大噴火

■ 浅間火山

日本列島中央部にある浅間火山は、日本国内に111存在する活火山のうち（2024年現在）、13にあたるランクAのひとつで、最も活動が活発な火山である。

浅間火山は、10万年前頃に誕生したとされ、地質学的スケールでは若い火山で、その活動ステージは、荒牧重雄らによれば、以下の3つに分けられるという（荒牧1968）。

- 黒斑期（10万～2.8万年前） 黒斑山の山体崩壊など
- 仏岩期（2万～1万年前） 軽石流の噴出など
- 前掛期（1万年前～現在） 天仁元年（1108）・天明三年（1783）の噴火

■ 天明三年（1783）の大噴火

江戸時代天明三年（1783）の大噴火は、当時の暦で4月9日より始まり、7月8日に終息をむかえるまで3か月間続いた。今からおよそ240年前のこの出来事については、たくさんの古文書や絵図、石碑・墓碑などが残されており、発掘された遺跡からも、火山災害の様子を知ることができる。

記録類を精査すると、この火山災害によって亡くなった方は、約1500人とも推定されている（堤2012を参照）。降下軽石は火口の東南東方向（の山麓で）の広範囲で確認できる

■ 天明三年の噴火の推移

当時の月日と【現在の月日】

- | | | |
|-------|---------|--|
| 4月 9日 | 【5月 9日】 | 噴火がはじまる。噴煙が覆い大地が鳴り響く。以後、5月25日まで噴火は沈静化。 |
| 5月25日 | 【6月24日】 | ふたたび噴火がはじまる。午前7時頃から石臼をひくような山鳴りが聞こえる。 |
| 5月26日 | 【6月25日】 | 午前10時頃から正午頃まで、大きな鳴動とともに強い爆発がある。 |
| 5月27日 | 【6月26日】 | 午後4時頃から6時頃まで鳴動がある。 |
| 6月17日 | 【7月16日】 | 夜半に大きく鳴動する。 |
| 6月18日 | 【7月17日】 | 夜半過ぎはなはだしい地響きがする。 |
| 6月26日 | 【7月25日】 | 午前8時頃から正午頃まで鳴動するが、煙は薄い。 |
| 6月27日 | 【7月26日】 | 午後4時頃大きな鳴動があり、煙が東にたなびく。 |
| 6月28日 | 【7月27日】 | 午後4時頃大きな鳴動があり、煙は東南にたなびく。 |
| 6月29日 | 【7月28日】 | 正午頃、5月26日よりさらに激しい大爆発があり、煙灰を東に吹き付ける。
江戸に降灰があり、家屋・戸障子が振動する。 |
| 7月 1日 | 【7月29日】 | 午後3時頃から5時頃まで激しく噴火する。 |
| 7月 2日 | 【7月30日】 | 午後2時頃から8時頃まで激しく噴火する。 |
| 7月 3日 | 【7月31日】 | 激しく噴火。軽井沢から高崎、埼玉県児玉のあたりまで火山灰が降る。 |
| 7月 4日 | 【8月 1日】 | 激しく噴火。軽井沢から高崎、埼玉県児玉のあたりまで火山灰が降る。 |
| 7月 5日 | 【8月 2日】 | 夜9時から11時、寝ていたものも起きるほどの噴火となり、黒煙の中から絶えず電光が発し前掛山へおびただしく火石が降って一円の火となる。 |
| 7月 6日 | 【8月 3日】 | 朝一度は噴火がやんだが、午後2時頃から夜10時頃にかけて激しく噴火し、牙山も大小火石が雨のように降り、火は裾野にも燃えひろがる。
江戸から銚子方面まで火山灰や火山毛が降る。 |
| 7月 7日 | 【8月 4日】 | 暮れの大焼けで火石が降ると人々は大騒ぎとなり、布団や戸板をかざして逃げ惑う者、家財を牛馬につけて逃げるものなど、我先にとろうたえた。軽井沢宿や沓掛宿では、猪・鹿・狼などの獣が山から飛び出してきて、パニックを助長。激しい噴火は翌朝にかけて続く。 |
| 7月 8日 | 【8月 5日】 | この日午前10時頃までに非常に大きい一大鳴響とともに焼け岩・熱泥の大押し出しが発生した。大噴火の後、火口の北側から「鬼押し出し」溶岩が六里ヶ原に流れ出したとされるが、その流下が最後とする見方には異論もある。江戸でも午前10時頃から正午頃まで、火山灰により薄暗くなる。この日をもって噴火が終息した。 |

「天明雑変記」「日本噴火史」「天明の浅間焼け」「天明三年浅間山噴火史」より作成

天明三年の火山噴火による噴出物等

2 天明三年噴火（1783）による火山噴出物

■ 天明三年の火山噴出物

浅間山の天明三年噴火による火山噴出物は（図01）、その東南麓の軽井沢から、主として北麓の群馬県側において地層として確認できる。

噴火ではまず、火山灰や軽石（As-A）が連続して降下し、最終的には、吾妻火砕流や鬼押し溶岩流が発生した。

降下軽石（As-A）は、火口の東南東の山麓で広範囲で確認できる（図02）。吾妻火砕流は、峰の茶屋から鬼押し園までの観光道路「鬼押ハイウェイ」周辺に分布する。

鎌原村を襲った巨大な溶岩塊が特徴的な鎌原土石なだれ（図04）の正体については長らく謎だったが、最近では鬼押し溶岩流（図03）が中腹の柳井沼に流入して二次爆発を誘発し、高速の土砂移動（鎌原土石なだれ）が生じたとする説などいくつかがある（天明三年を語り継ぐ会編2024）。

鎌原土石なだれは（図06）、鎌原観音堂の50段の石段のうち35段を埋め（図07）、村を埋めつくしたあと吾妻川へと流入し、天明泥流となって利根川流域の村々を飲み込んだ（図05）。

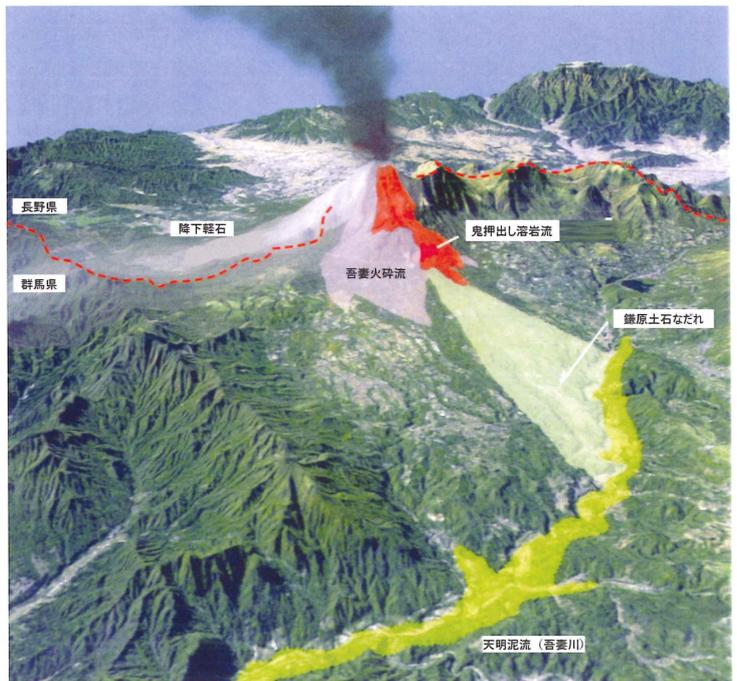


図01 浅間火山天明三年噴火の噴出物



図02 降下軽石 As-A（火口の東側露頭）



図03 鬼押し溶岩流（浅間園）



図04 巨大な本質岩塊（プリンスランド）



図05 天明泥流（伊勢崎市上福島）



図06 鎌原土石なだれ（孺恋村鎌原）



図07 土石なだれ被災者（鎌原観音堂）

3 美斉津家による浅間山噴火絵図の保存

本書で紹介する天明三年の浅間山噴火絵図は、小諸市八満の美斉津一夫のコレクションの一部で、8葉からなり『美斉津絵図A』と呼称しておく。

美斉津一夫は博学家で、植物学者の牧野富太郎との交流があったり、地元石神遺跡の遮光器土偶を蒐集するなど、地域の文物を大切に保護した。浅間火山にも深い関心を持ち本噴火絵図もそうした経緯で収集がなされた。

昭和10年（1935）の東京帝国大学浅間火山観測所の開設の際にも創設者の寺田寅彦や石本巳四雄・水上武らとともに一夫の姿がある。絵図は子息の美斉津洋夫と昭子夫人へと受け継がれ、現在も大切に保管される。



図09 牧野富太郎と美斉津一夫



図08 浅間火山観測所にて 昭和10年（1935）



図10 美斉津洋夫・昭子

4 長野県佐久平からみた浅間山



図11 佐久市西屋敷からみた浅間

浅間山は、黒斑山・仏岩・前掛山の3つの火山の総称である。狭義には、前掛山を指して浅間山と呼称する場合もある。黒斑山と剣ヶ峰は、それぞれ独立峰のように見えるが、裾野ラインを追うと同一の火山体（黒斑火山）であることがわかる。中腹にはラクダの瘤のような石尊山がある。また、目視しにくいのが、前掛山の山体の東下に仏岩が存在する。前掛山の山頂には中央火口丘である釜山があり、天明三年の噴火により形成されたものである。噴火絵図と対比されたい。

5 美齐津絵図A 8葉

被せ絵スタイルで上部に糊代が残る。手筆から同一人物に描写である。



01 [ID:0001-misaizu-A] 図12



02 [ID:0002-misaizu-A] 図13



03 [ID:0003-misaizu-A] 図14



04 [ID:0004-misaizu-A] 図15



05 [ID:0005-misaizu-A] 図16



06 [ID:0006-misaizu-A] 図17



07 [ID:0007-misaizu-A] 図18



08 [ID:0008-misaizu-A] 図19

6 天明三年までの浅間山全体之図

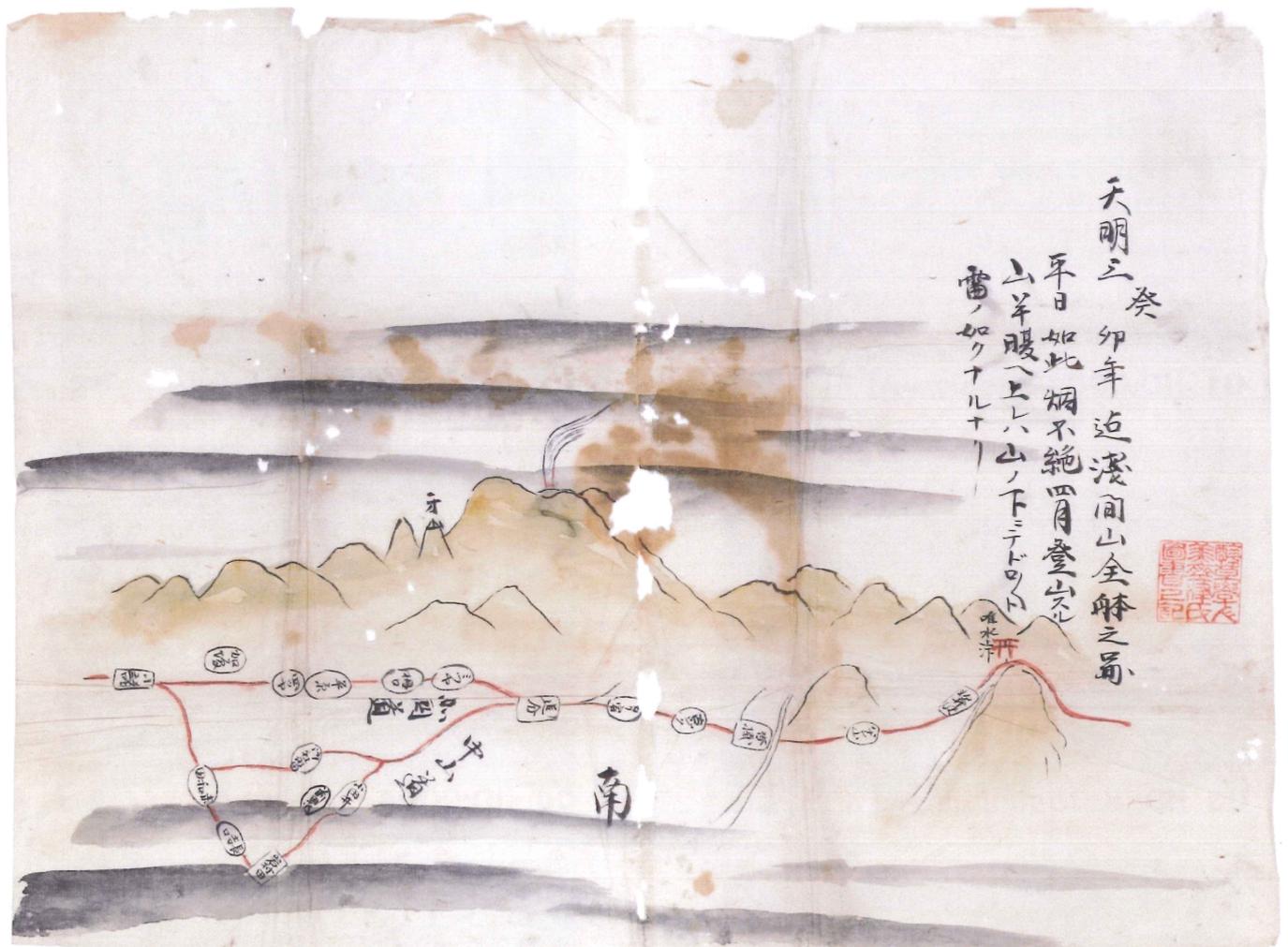


図20 ID:0001-misaizu-A

【寸法は縦×横で余白も含んだ紙の大きさを表す】 43 × 57cm

天明三癸卯年まで浅間山全体の図
平日はこのごとく煙絶えず 四月登山する
山半腹へ上れば、山の下にてどろどろと
雷のごとく鳴るなり

天明三癸卯年迄浅間山全跡之図
平日如此煙不絶四月登山スル
山半腹へ上れば、山の下にてどろどろと
雷のごとく鳴るなり

【解説】

天明3年癸卯（みずのとう）年、すなわち天明の大噴火（1783）が始まる前までの浅間山の全体図。現在でも同様だが、上空の偏西風により、東に傾く噴煙を細々と上げている様子が見える。

山容から見ると、牙山（ギツパ山）が描かれ、手前が浅間山の南麓の信州側で、現在の佐久平あたりからの構図であることがうかがえる。角印は「酔草学人美齊津氏図書之記」とあり、植物にも学んだ美齊津一夫氏の号である。

上州から信州へと入った北佐久の中山道ルートが赤線で描かれ、碓氷峠-ハナレ山-沓掛-古宿-借宿-追分-小田井-岩村田などの地区がみえる。

追分から西方向に向う北国街道では、今日のミツヤ（三ッ谷）-柵口（馬瀬口）-平原-四ッ谷-加増-小諸の村落や宿場名が書かれる。

7 5月26日焼出し始めの体



図21 ID:0002-misaizu-A

29 × 43cm

天明三癸卯年 五月二六日 焼出し始めの体

それより六月毎日 七月一日 同二日 同六日 七日 八日大焼け昼夜の
 凶 別にあり この大焼の時の日本国中に炭降りとなり あわせて信州
 のうちには格別砂損もなきよし ただ上野下野など砂損夥しく人屋亡
 失、利根川などへ流れ来る死骸等数をしらず この川水熱湯となりて
 同辺の人また多く死亡する、すべて三四十里を隔てて山の見へざるほ
 どの所へにて焼石等飛散りて、不慮に死亡する人ありと云々

【解説】

天明3年5月26日（新暦6月25日）より噴火が始まったとの記載。
 それから6月は毎日、7月1日・2日・6日・7日・8日に大きな噴火
 がたった。昼夜の凶は別にある。この大噴火の時は、日本国中に灰が
 降ったが、信州では格別に砂損もなかった。ただ上野や下野などは砂
 損がおびただしく、家屋が失われたり、利根川などへ流れ来る死骸も
 数知れずであった。利根川の水は、熱湯となり、流域の人は数多く死
 亡した。30・40里を隔てて、山の見へないところにも焼石が飛散り
 、それによって不慮に死亡する人もあったらしい。

天明三癸卯年
 五月廿六日始而焼出之体
 夫ヨリ六月晦日七月一日同二日同六日七日八日大焼昼夜
 之凶別ニアリ此大焼ノ時ノ日本国中ニ炭フリト也
 併信州ニハ格別ニ砂損モナキヨシ唯上野下野
 ナト砂損夥シク人屋亡失トナリテ同
 死骸等数ヲシラス此川水熱湯トナリテ
 辺ノ人又多ク死亡スルスヘテ三四十里ヲ隔テ
 山ノ見ヘサルホトノ所ヘニ焼石等飛
 チリテ不慮ニ死亡スル人アリト云々

9 七日暮六ツ時中刻



図23 ID:0004-misaizu-A

43 × 57cm

7月7日暮六ツ時中刻
東の方へなびきたるかたち、この時百里程の所 暗闇となる

七日暮六ツ時中刻
東方へナツヒキタル
ノチ此ナ百里
ノ所闇トナル
程カ東七

【解説】 8頁 図22 ID:0003-misaizu-A

6月29日・7月1日・2日と、7月6・7日・8日の、この3日間の昼夜の大焼けの図である。3日間とも大焼け振動甚だしく、昼も火山雷（電光）が夥しく、噴出した溶岩噴泉が前掛山に吹き落ちる様子が描かれている。
また、東にたなびく噴煙の中に火山雷の電光が光り、この煙が3・40里四方と例えられるように、かなり遠方でも見えわたったことがわかる。
利根川を流れた天明泥流は、昼夜熱湯で、3・40里という遠方まで洪水が起こり、多数の人家が崩れて亡失したとある。
3・40里ほどは焼石が降下して、これに当たって死ぬ者も少なからずいた。

【解説】 9頁 図23 ID:0004-misaizu-A

7月7日（現在の8月4日）暮六ツ時中刻（午後7時前後）、噴煙が山麓の北東にたなびき、かなり遠方（100里）まで暗闇に包まれた。山麓を這うような煙は、火砕流の流下を示している可能性がある。

10 七月朔日 同月六日 同月七日 夜分大焼之図

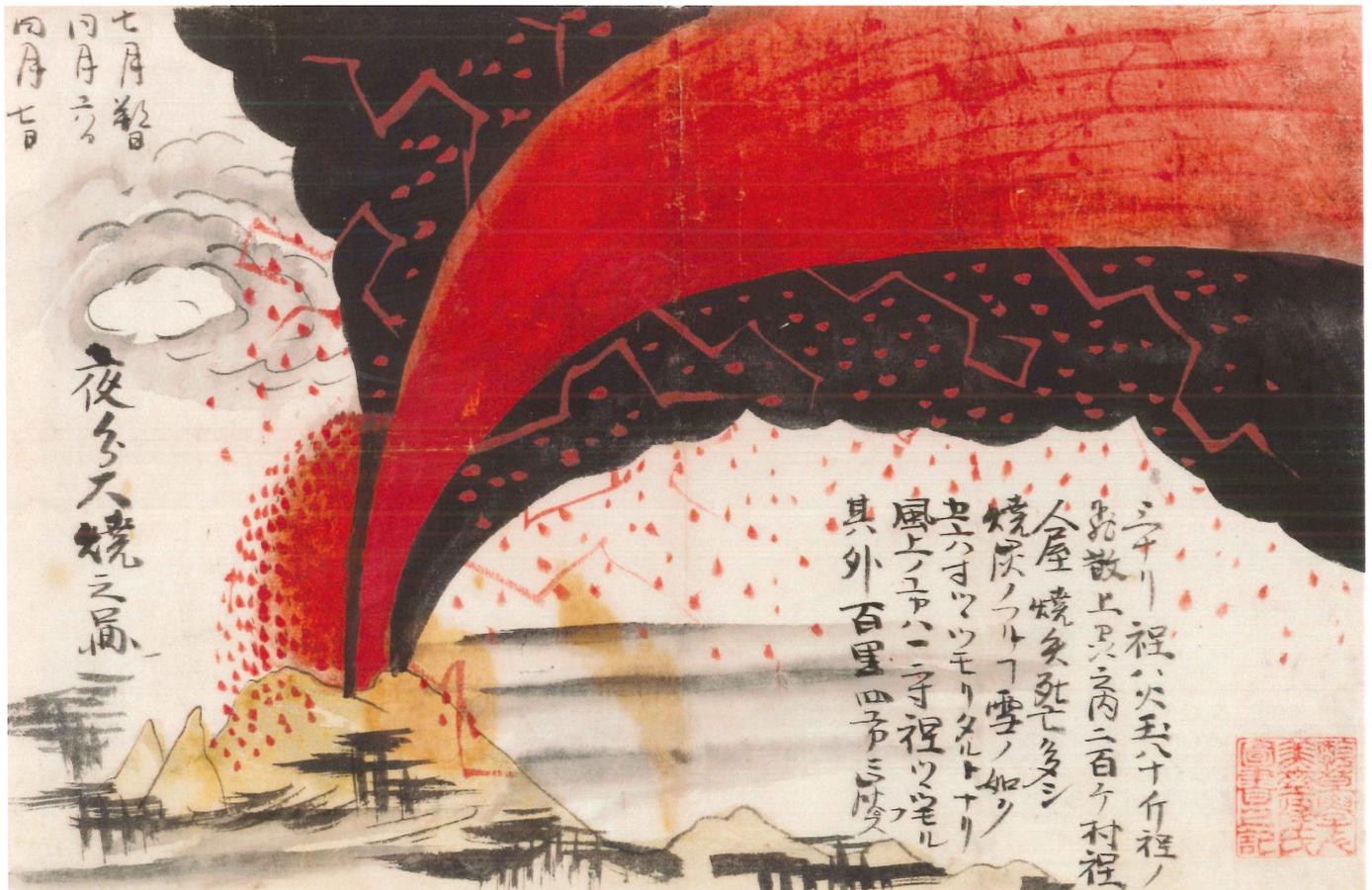


図24 ID:0005-misaizu-A

29 × 43cm

夜分大焼之図
同七月朔日
同六月六日
同七月七日

七月一日 同月六日 同月七日 夜分大焼之図

三十里は、火玉八十斤ほどの飛散、上州のうち二百ヶ村程人屋焼失、死亡多し。焼灰の降ること雪のごとく、五・六寸ふり積もりたるとなり風上の方は一二寸程ふり積もるそのほか百里四方に灰ふす

三十里程は火玉八十斤程ノ
飛散上州ノ内二百ヶ村程ノ
人屋焼失死亡多シ
焼灰ノ降ること雪ノ如ク
五・六寸ノツモリタル
風上ノ方ハ一二寸程ノツモリ
其外百里四方ニ灰フス

【解説】

歴史教科書などに引用される、よく知られた天明三年の夜分大噴火のシーンで、赤と黒の織り成す鮮やかな色遣いで、迫力のある構図となっていて、噴火のすさまじさが伝わってくる。

天明噴火のピークとなる、7月1日（現在の7月29日）、7月6日（現8月3日）、7月7日（現8月4日）の夜間の噴火の様子を、長野県佐久地域側から描いている。

東に倒れる噴煙、突き上げた後東に倒れる火柱、山頂周辺に降り注ぐ溶岩噴泉、火山雷、降下する火石などが描写される。

このような噴火を通じて、軽石層（図02）が山麓にもたらされた。

11 焼口ヨリ又山一ツ吹出シタリ



図25 ID:0006-misaizu-A

29 × 43cm

五月二六日まで焼出し、それまでたびたび大焼にて
七月六日・七日・八日別の大焼があり、その後以て図噴火口
より、また山一ツ吹出したり

五月廿六日
夫々大焼
八日別大焼
焼口ヨリ又
山一ツ吹出
シタリ

【解説】

5月26日まで焼け出し、天明3年の噴火のピーク、すなわち7月6・7・8日の後、また山ひとつ噴出したとあり火砕丘である釜山が形成されたことを示す。
前掛山の外縁のその中央に、釜山が描いてある。



図26 中央火口丘“釜山” 1783年に形成された。
気象庁提供（自衛隊の協力により撮影）

12 信州浅間山全体之図

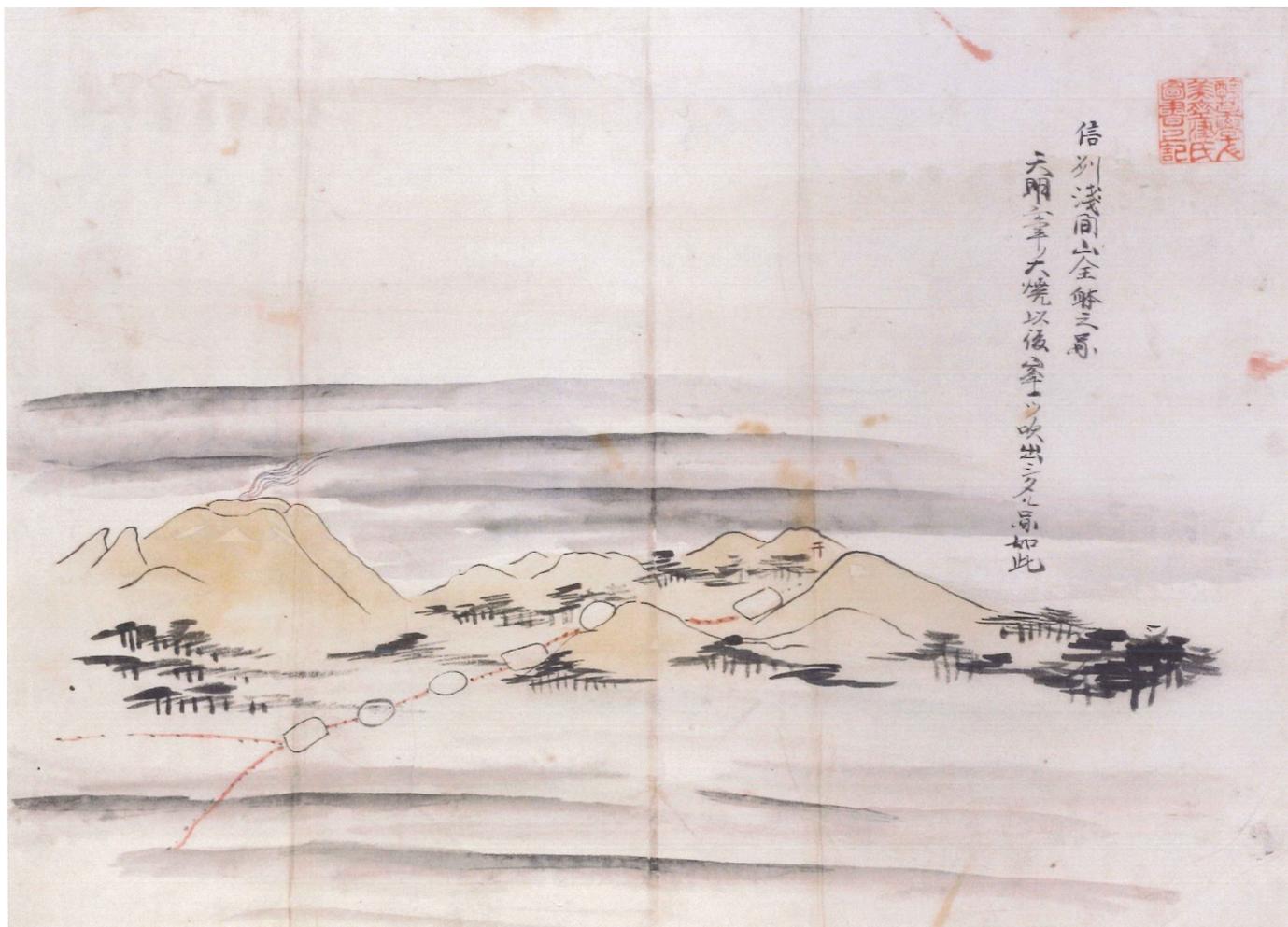


図27 ID:0007-misaizu-A

43 × 57cm

天明三年の大焼以後、このごとく峯一ツ吹出したる図

【解説】

天明三年の大焼以後、このごとく峯一ツ吹出したる図とあるが、「峯一ツ吹出したる」とは中央火砕丘“釜山”の形成を意味する。

13頁の図28には描かれませんが、石尊山や中山道とその宿場、北国街道がみられ、上信国境の峠にある熊野神社の鳥居の記号が入る。宿場の名称は枠内には入らず、書き忘れか。

天明三年ノ大焼以後峯一ツ吹出したる図如此

引用・参考文献 (主なもの)

- 荒牧重雄 1968『浅間火山の地質』 地学団体研究会
- 大浦瑞代 2007「天明浅間山噴火災害絵図における写図の特徴」『交通史研究』70 交通史研究会
- 北原糸子 2003『近世災害情報論』 塙書房
- 関 俊明 2010『浅間山大噴火の爪痕：天明三年浅間災害遺跡』 新泉社
- 堤 隆 2012『浅間：火山とともに生きる』 ほおずき書籍
- 天明三年を語り継ぐ会編 2024『天明三年浅間山大噴火を語り継ぐ』 雄山閣
- 古澤勝幸編 1995『第52回企画展 天明の浅間焼け』 群馬県立歴史博物館
- 安井真也 2024「天明三年浅間山噴火の実態」『天明三年浅間山大噴火を語り継ぐ』 雄山閣

13 享和三癸亥年十月七日



図28 ID:0008-misaizu-A

43 × 57cm

享和三癸亥年十月七日、暮六上刻まで
鳴出し大焼、震動甚しく 光雷の如し

【解説】

享和三癸亥年は、西暦1803年にあたり、10月7日は11月20日、暮六上刻は18:00～18:40までとなる。

この時刻まで鳴出し大焼、震動が甚しく、ほぼ真上にあたる噴煙中には火山雷が顕著である。

天明の噴火以後であるので、中央火砕丘である釜山の描写もなされる。

この1803年の絵図は、ここまで紹介してきた天明三年（1783）の7枚の絵図【ID:0001～0007-misaizu-a】と手筆が同じで、同一人物によって描かれたものであることがわかる。

すなわちこの絵図の成立は、天明噴火後30年の享和噴火も描いているため、1803年以降のことであることがわかる。

享和三癸亥年十月七日暮六上刻
鳴出し大焼震動甚しく光雷の如し

書籍名 「美斉津家所蔵 浅間山噴火絵図 美斉津絵図A」
発行者 明治大学黒耀石研究センター 堤 隆
編集者 明治大学黒耀石研究センター 堤 隆
執筆者 明治大学黒耀石研究センター 堤 隆
発行日 2024年11月11日
総頁数 14頁
版 数 第1版

御教示 安井真也・関俊明・飯島聖 氏
撮影者 絵図8葉は大木文彦氏
図 版 下記以外は堤による
図提供者 図01：長野県 図05：群馬県
図07： 嬬恋郷土資料館
図08～25・27・28：美斉津洋夫・昭子氏
図26： 気象庁 浅間山火山防災連絡事務所

※ 本書の無断転載を禁じます

<https://researchmap.jp/takashitsutsumi>
著者および関連書籍情報



本書は、堤隆を研究代表者とする科研費21K00960「浅間山南麓の火山災害考古学序論」の成果の一部です

謝辞 本書は、絵図を所蔵される美斉津洋夫家の深いご理解によって製作されました。日本大学安井真也先生には丁寧なご教示を頂戴しました。貴重な資料をご提供いただいた皆様にも厚く御礼申し上げます。